鎮守の森だより

NPO 法人　社叢学会ニュース

第 25 号
2007 年 1 月 12 日

自 然 と 人 間 の 共 生

～　鎮守の森の伝統　～

社叢学会理事長・京都大学名誉教授
上田　正昭

21 世紀に入って、早くも 7 年目の新春を迎えました。よりよき環境の創生と紛争から平和への前進を祈念し、会員各位の更なるご活躍を期待します。

地球の環境をどのように守り活かすか。国連は 1972 年にスウェーデンのストックホルムで人間環境会議を開催し、「人間環境宣言」と 109 項目にわたる行動計画を採択しました。爾来、繰り返し環境保全のための努力を積み重ねて、「気候変動枠組み条約」や「生物多様性条約」など、注目すべき条約を採択してきました。

1965 年にユネスコは生涯教育の重要性を提起し、「異民族間の相互理解と交流」をその教育の重要な柱の一つに位置づけ、2001 年には「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を採択して、多文化共生社会の実現を強調しました。

環境の保全は自然と人間がいかによりよく共生するかという問題と深いかかわりをもち、多文化の民族相互における理解と交流の促進は、人類が同胞であり、人間と人間がいかに共生するかという問題に深くつながります。

1960 年代から日本の歴史と文化の究明は、島国である日本列島内部の動向からだけでは充分なみのりをあげることはできないことを自覚して、アジアに連動するアジアのなかの日本のありようを探究してきました。そして 1990 年の 3 月にはアジアの古代史・考古学の研究者を中心とするアジア史学会が設立され、第 6 回北京大会で会長に選ばれて今にいたっていますが、欧米がリードした 20 世紀に対してアジアが輝く 21 世紀をと念願してまいりました。

現在のユネスコの事務局長は元フランス大使であった松浦晃一郎氏であり、国連の新事務総長は韓国の潘基文氏です。国連とユネスコもその中核となるリーダーは、韓国人と日本人です。1 月下旬には松浦事務総長と懇談する予定があり、潘事務総長からは韓国の大阪総領事館を介して面談したいとの連絡が入っています。ユネスコの民族相互の理解、国連の自然の保全、この両者を総合する必要を力説したいと考えています。

自然と人間の共生の接点として、縄文時代のいにしえから今日にいたるまで、鎮守の森は生きつづけてきました。その鎮守の森の伝統を、日本人みずからが改めて再発見すべきときと存じます。社叢学会の役割はますます大きくなるに違いありません。会員の皆様のいっそうのご支援・ご協力を期待します。

第 23 回関西定例研究会　報告　　2006 年 11 月 25 日
（於：伏見稲荷大社儀式殿）

信仰が支えた照葉樹林、世界遺産春日山原始林を鹿が喰う

講　師　　前迫　ゆり　（奈良佐保短期大学教授）
ｺﾒﾝﾃｰﾀ　山倉　拓夫　（社叢学会理事・大阪市立大学教授）

春日山が荒れている　1998 年にアマチュアの植物研究者から春日山の状態が悪くなっていると聞き、実際に行ってみると、すでに壊滅的になっている大台ケ原ほどではないが、鬱蒼とした原始林が見渡しのきく森林構造になりつつあることや林床にあるはずの多くの植物が見られないこと、特に鹿が樹皮剥ぎをしていることが目に付き、調査を開始した。ここでわかったことは、千年の照葉樹林の中に外来種の植物が拡がっており、世界的にもないのではないかというほどの状況になっていることと、世界的にも問題なっている鹿問題も深刻で、農業や人への被害を上回る自然生態系へのマイナス要因が野生動物によって引き起こされているということだった。春日山原始林では、特別天然記念物の原始林と天然記念物の鹿とナギ林の３者の複雑な関係の中で春日山に負荷がかかっている。

春日山原始林とは　春日山原始林は、都市域にありながら多様性の高い生物を育んでいる点が評価され､特別天然記念物に指定されている｡約 300ｈの指定地域には植林地も含まれ、照葉樹林は 300h 満たないが、孤立的な環境（森林）でありながら、千年にわたってうまく更新されてきた森だといえる。近畿地方の都市の隣接地にこうした原始林が残っていることが貴重で、樹木の種類について明らかなデータはないが、ブナ科のカシ・シイ類（＝常緑広葉樹）が圧倒的に優先している。2003 年の絶滅危惧種の調査ではホンゴウソウも確認している。また、春日大社の境内地である御蓋山には天然記念物に指定されたナギの群落がある。

外来種問題　昭和３年ごろから奈良公園に街路樹として導入されたナンキンハゼは、1968 年の室戸台風の後で、春日の森への侵入が確認され、以後、倒木により林間に空間ができた場所（ギャップ）を中心に、猛烈な勢いで増えている。ナンキンハゼは明るい所を好み、台風などでギャップができると入り込むが、大きな木の陰になると枯れる。一方ナギは、奈良では国内外来種とされ、800 年代に神木として献木され御蓋山に植えたのが起源であろうと思われる。暗い所でも平気で入ってくる上に寿命が長く、大木の下になっても順調な生育を続ける。面的に着実に広がっていることから、季節風など毎年必ず起こる自然要因によって種が運ばれるのではないかと思われる。森の上部は照葉樹林でも次の世代を作るのはナギという状況で、明るくても（=ナンキンハゼ）暗くても（=ナギ）外来種がどんどん入っている。ナンキンハゼは 100 年単位で続く樹木ではないが、ナギは 1,200 年に亘って広がり続けており、こちらのほうが危険だろう。

鹿問題　春日の鹿は、768 年に白い鹿が御蓋山に降り立った神の使いであると考えられていることが問題を複雑にしている。奈良公園の限度は 800～1,000 頭だと見られるが､平成元年以後増加し、1,200～1,300 頭になっている。奈良公園の鹿がどれくらい春日原始林に入り込んでいるかは明確なデータはないが、樹皮剥ぎの状況から、かなりの数が森の中に入り込んでいることがわかる。ある程度成長してしまうと、樹皮剥ぎをされても枯れることはないが、ヤブツバキやモチノキが好きで、細い木は一気に食べてしまう。実生の発生の状況を調査したところ、45ｈに 55 種類が確認され、これは林間構成種と同じであることから、種子の供給があれば実生は出てくることを意味する。このことから、発生までは多様性が確保されているが、少し大きくなり、鹿の目に入るようになると、食べられてしまっていることがわかる。森林は約 180 年の周期で回転し更新するが、実生が少なく、樹種がない中で次の森を作ることができるかは危うい。

今後の課題　地域の住民はこれまで春日の森の空気をありがたく感じながら生きてきたが、そうした感覚が薄れていることが森を守るためにも非常に問題だと思われる。春日の森をどういう場として地域の人が関るか、を考えていかなければならないだろう。鹿と原始林は、双方が文化を背負ったものであり、大台ケ原のように割り切って鹿の駆除・個体数制限は当てはめられない。どういう方向に地域環境を持っていくか、森と鹿と人の暮らしをどうつなげていくのかという議論をしながら鹿の問題を科学的に解明していかなければ、文化論だけでは解決できないし、野生動物管理という数字データだけでもいけない。

森はを文化的・精神的な側面からも理解することが必要で、社叢学会の意味もここにあると思う。木を植えるという実際的な管理の重要性もあるが、森をどう使うか、どういう場として地域の人が関るのか、が森を良くする。人の営み・意識が森に向かっていかないと荒れてしまう。春日山は鎮守の森としての文化と歴史を背景に、今に残っている。目下のところ行政も動いていないが、議論をしていかないと春日山の原始林は鹿の負荷がかかり、苦しい状況になっている。

社叢学会亀岡支部　　2006年11月19日
（於:大本本部第３安生館大広間）

4年間に及ぶ社叢植物調査の結果を報告

平成18年度総会を開催

社叢学会亀岡支部は平成14年8月に設立され、今年で5年目を迎える。この間、亀岡市における全神社(104社)の悉皆調査を実施し、その後毎年、社叢や寺院の森の植物調査活動を継続し、現在に至っている。この調査の成果を集約し、更にこれからの社叢のありようを探るため、平成18年11月19日、大本本部第3安生館大広間において亀岡支部総会を開催した。

総会には、亀岡市長や亀岡商工会議所会頭等の来賓を始め、亀岡植物誌研究会のメンバーや神職、神社総代等約80名が出席。上田正昭理事長は挨拶のなかで、「全国的な社叢学会の取り組み状況の中でも社叢の植物調査を4年間続けているところは亀岡支部だけである」と、これまでの支部活動を評価した。当支部では、この言葉を今後の励みとし、更に活動を続けていきたいと考えている。

当支部による社叢の植物調査は、平成15年5月から始められ、調査箇所の設定については、神職・総代等と事前調整を行った上で、津軽俊介・大本花明山植物園長を代表とする亀岡植物誌研究会のメンバーのもとで実施されている。冬季を除き毎月、必ず第4日曜日に行われており、これまでの調査回数は32回に及んでいる。

総会においてもこの植物調査の結果を中心議題とし、調査代表の津軽氏からは、絶滅が危惧されている稀少植物やこれまで未確認の巨木・名木の発見、全国的にも、やや、めずらしいとされる樹木の大群落等々、社叢ならではの貴重な数々の調査の成果が報告された。なお、この調査結果は亀岡植物誌研究会の会報「亀岡の自然」に2回に亘り掲載されている。

総会ではこのあと、村田源・森林再生センター理事長による「植物と環境」をテーマとした講演が行われた。

村田先生は、「絶滅が危惧されている稀少植物は、植物にとって好条件がそろつているところよりも、岩場や湿地、海岸、または昔から草刈りの行き届いた草地等、むしろ条件が厳しいところに生き残っている例が多く見られる。このことは、条件の良い立地はいくつかの優占種が占領してしまい、特殊な耐久生活に耐えて生き残る稀少植物を駆逐してしまうのではないか」、と述べられ、人間社会の歴史にも共通の事例が見られることを実感させられた。

社叢学会亀岡支部長　宮内　筧

講演する村田源・森林再生センター理事長

次回予告(第24回関西定例研究会)

日　　時　2007年1月27日（土）　13:30～15:30
場　　所　ビル･葆光６階　大道の間（中京区室町通御池南下ル　TEL075-211-4171）
テ ー マ　ダム湖に沈んだ鎮守の森　～奈良県吉野郡川上村大滝に築かれたダムによって迎えたタブノキ林の結末～
講　　師　菅沼　孝之（社叢学会副理事長・奈良女子大学元教授）
ｺﾒﾝﾃｰﾀｰ:　武田　義明（社叢学会理事・神戸大学教授）
※　関西定例研究会今後の予定
３月24日(土)：伏見稲荷大社　７月28日(土)：伏見稲荷大社　９月29日(土)：会場未定

事　務　局　か　ら

- 謹んで新春のお慶びを申しあげますとともに、会員の皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。関西地方では早春を思わせるようなあたたかく、穏やかな日差しの新年を迎えました。本年も何卒よろしく学会活動にご協力賜りたくお願い申し上げます。
- 平成 19 年度の通常総会は、5 月 26 日に伏見稲荷大社で開催いたします。研究発表やシンポジウムの他、向日神社の篝火狂言見学（懇親会終了後）や京都周辺の社叢の見学会（27 日）も予定しております。ぜひご参加下さい。
- 例年通り、総会での研究発表者を右記の通り募集しております。奮ってご応募下さい。
- 会員各位の著作をこの紙面でご紹介したり、会報に書評を掲載したりいたしております。ご出版の節は、ぜひ事務局に一部ご寄贈下さい。

編　集　後　記

暖かいお正月！　と思っていたらば！　そろそろまじめに仕事しなくっちゃ！　と思い始めた頃にえらい冷え込み。やる気（そんなのあったっけ？！）なくなっちゃうよ。四条大橋から鴨川の上流を見渡しても、天狗さんのお住まい鞍馬山の辺りはすっかり雲の中。ひぇっ！　さぶ。

で、お正月だから、「鎮守の森だより」も“新春特大号　前代未聞！　空前絶後！　８頁！”のはずが…　M先生、困りますよ、ほんとに。次こそ　頼みましたよ！　あ、も一人のMさんもですよ！　やれやれ、今年も“もう　いいかい？”、“まぁだだよ！”、“ええかげんにせんかい！”、“･･･”が続くのかなぁ。シワが増えたらどうしてくれる！

（藤岡　郁）

研 究 発 表 者 募 集 ！

テーマ　社叢に関する理論的研究
　　社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
発表時間　20 分(報告 15 分＋討論 5 分)
応募締切　2007 年 2 月末日必着

※　応募者は住所・氏名・職業を明記の上、発表内容を 300 字～400 字にまとめて事務局(京都)に御送付下さい。
※　応募者多数の場合は研究発表審査委員会で審査し、３月末に採択通知を致します。
※　採択が決定し、大会当日に配布する資料は４月末までに事務局にお送り下さい。

次回予告(第 24 回関東定例研究会)

日　時：２月 17 日(土)　14:00～17:00
場　所：國學院大学・渋谷キャンパス 120 周年記念 1 号館 1205 教室
　　（東京都渋谷区東 4-10-28）（※教室は変更の可能性あり）
テーマ：森林・自然環境・造園学
講　師：熊谷　洋一（東京農業大学教授・東京大学名誉教授）
ｺﾒﾝﾃｰﾀ：藤田　直子（東京大学森林風致計画学研究室･環境学博士）

次回予告(第 11 回中部定例研究会)

日　時：2007 年2月 18 日(日) 13:30～16:00（日曜日です。ご注意下さい）
場　所：知立神社（愛知県知立市西町神田 12　Tel0566 - 81 - 0055）
テーマ：知立神社の社叢について
講　師：上山　巌夫（知立神社宮司）
※　第 12 回は３月 24 日(土) に椿大社（三重県鈴鹿市山本町 1871）に於いて

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115　京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町 373 番地
　　みよいビル 303 号　TEL075-212-2973　FAX 075-212-2916
　　URL　http://www2.odn.ne.jp/shasou/　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
　　社叢学会関東支部　〒101-0031　千代田区東神田 1-8-11　森波ビル２F
　　TEL03-5875-8423　FAX 03-5875-8321　E-Mail shasou@macrovision.co.jp